

愛はどこに？

ヨハネ第一 4:7～12

人生とは何でしょうか？ 言い方を変えましょう。私たちがこの地上に生かされている目的は何でしょうか？ 聖書は私たちの人生とは愛を学ぶことだと言います。大切なことは神と人を愛することを学ぶことだと教えています。

“先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。”そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。

『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。”マタイ 22 章 36～40 節

このように主イエスは神と人を愛することが最も大切な戒めであると言われたのです。神と人を愛することがどうして重要なのでしょうか？それは神が愛だからです。泳いでみると魚のことがほんの少し理解できるように私達は愛するを通して神を深く知ってゆくことが出来るからです。そのことをヨハネは7節で「愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。」と語ります。愛する者はだれでも、神様のことを知っているということです。続く8節では、「愛のない者に、神はわかりません。」と言い切っています。では私達は「ようし！これからは頑張って神と人を知るために愛してゆこう。人を助けてゆこう。善行に励もう」と意気込むのが良いのでしょうか？ そうではありません。わたしたちの行いで、神様を知ることが出来るのであれば、イエス様がこの世に来る必要はありませんでした。ヨハネは、そのようには考えていません。神様を知るといふ、きっかけ、あるいは要因が、わたしたちの「愛する」といふ行いによるものではありません。ヨハネが伝えたいことは根源的、源として「神様が愛である」と言っているのです。ちょうど喉が渇いている人にきれいな川から水を汲んできて飲ませてあげることが出来た時にこの水は、泉あるいは水源地があるから出来たことなんだと自覚するようなものです。

では私達はしたら、人を愛する者になれるのでしょうか？ヨハネはこの手紙の4章19節で「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」と語っています。私達の人に対する愛し方というのは多くの場合、親から学んでいます。暴力を受けて育てられた子どもは、親が子を愛するというのを、暴力をすることだと、学び、自分が親になった時に、自分の子どもに親から受けたように、暴力を振るってしまうという事があります。そして大抵の場合、親は「しつけのためにそうした」と言います。そんな極端なことを言わなくても例えば子供の帰りが夜遅くなった時は心配します。しかし、その子が帰ってきた時に出てくることばは「ばかやろう。何してたんだ。こんな遅くまで」と言う。子どもは怒られ、拒否されたように感じ、ますます心の溝が深くなる。これがその家の愛の伝え方なのです。そのように、わたしたちは、親から受けた愛というのが、わたしたちの人に対して行う「愛」の原型になっていることが多いのです。ですから、どういう形であれ、もし親や他人から、一度も愛されていないということであったりすると、わたしたちは愛という具体的な形も、愛するという事も、わからないままになるということになります。

さてヨハネは「愛する者たち」と7節で呼びかけます。この呼びかけはこの手紙で6回も出てきますが「愛する者たち」というのは、神の愛、アガペーと呼ばれる愛によって、愛されたものたちのことをヨハネは呼びかけています。言葉を簡単にすると、愛する者とは、神様に愛された者たちであるということなのです。「愛する者たち」つまり「あなた達は神様に愛されているのですよ」という呼びかけです。神様という親から、愛されたという経験を持つものは、愛するということ、愛されるということが、なにであるかを知ります。そして、愛の原型を知り、自分たちも、その愛の形にならって、隣人や兄弟姉妹を愛することをはじめめるのです。その愛の原型、愛の源こそが、神様そのものなのです。それは生まれつきの私たちには分からないし、気がつかないことです。わたしたちは、イエス様に会い「愛される者」であるこ

とを知り、聖霊によって「愛する者」へと変えられて行くのです。神様は愛であり、愛の源流でもあられます。その愛の流れは、どこに到達するのかというと、それは、9節にありますように、イエス・キリストの十字架の死を通して「わたしたちに示されました」 わたしたちに示されるということは、わたしたち一人一人が神様の愛を、心でも、頭でも、わかるように明らかにされたということです。この愛は、イエス様によって、私たちに、注がれ、実践され、明らかにされて、歴史的に目に見えるものに、そしてわたしたちに体験可能となりました。

ここで「わたしたちに示されました」ということばを細かいですがもう少し丁寧に見ておきますと「わたしたちに」と書かれている言葉は、大きく2つの意味を持っています。一つは私たちの「内側」ということであり、もう一つは私たちの「間」という意味もあります。従って、この「愛」は、じつは、私一人だけにではなく、隣人との「間」のために、言い換えるならば隣人との関係のためにも、神様は愛する独り子イエス様をこの世に送ったということです。神は愛する独り子であられるイエス様をわたしたちの罪を赦し、贖うためにこの世に遣わされました。ここに愛があります。私たちは、この愛に愛されるまでは、本当の愛を知りませんでした。どうして愛を知ることができたのでしょうか。それは、イエス様が十字架に掛かって犠牲となってくださったことで、分かったのです。私たちはこの愛に愛されるまでは、神様を敵だと思っていました、または、神様に対して、無関心でありたい人でありました。なぜならば、それまでは、神というのは、恐れの対象でしかなかったからです。なぜ滅ぼされ、なぜ人は死ななくてはならないのか。それは、己の罪のためです。罪というのは、自分が神様から離れようとする。神様に無関心であること。神様を差し置いて、自分を世界の中心にすること。自分が主人で、神様を僕のように扱うこと。そのような「自分の罪のために、自分は神によって裁かれて、滅ぼされるんだ」と聖書がそう告げています。そのような人にとって、神様は怖い存在です。怖い存在に対して私たちは怯えてうずくまるか、敵対視して反抗しようとしみます。しかし、その罪のための滅びの裁きを、神様御自身が、愛する独り子イエス様をこの世に送り、その人間が受けるべき死の裁きを、愛する独り子にすべて負わせ、わたしたちの罪を、愛する独り子の犠牲によって、赦してくださったのです。ここに愛があります。勝手に敵対していた私たちを、神様は愛する子を手放しても、愛したいとお考えになり、実行してくださいました。「ここに愛があるのです。」とヨハネは、10節で宣言します。その愛を知ったもの、愛を受けたものがすべきことをヨハネは11節で書いています。それは「互いに愛し合う」ということです。しかし、ここで、あれっと思う方がいらっしゃるかもしれません。神様に愛されたんだから、神様に愛し返して、お返しをしなくていいのと思う方がいらっしゃるのではないのでしょうか。それはしなくて良いのです。神様の愛に応えること、それは、神様に恩返しするために、なにかすることであるとわたしたちは考えてしまいます。神様のために愛された分だけ、私も神様に同等に愛し返したいと、考えます。しかし、少し考えてみると、そのように考えているわたしは、神様の愛をただの恩のように考えているのではないのでしょうか。神様はわたしたちに、恩を売ったかっただけなのでしょうか。そうではありません。神様の愛、アガペーと呼ばれるその愛は、無償の愛です。神様はわたしたちに恩を返せと、せがむような方ではありません。わたしたちを愛する時に、御子をこの世に送った時に、そのような恩を着せようなどとは考えておられません。神様の愛は、無償の愛であるということ、言葉でわたしたちは知っているはずなのですが、わたしたちはそのことを忘れ、「ああ、神様を愛し返すことができなかつたなあ」と己の落ち度ばかりに目を向けてしまい、愛そのものである神様に対して顔を向けなくなってしまいます。愛を見つめず、自分ばかり見つめていると、自分が如何に愛されているのかが、わからなくなります。わたしたちは、愛されていることがわからなくなると、次第に愛し方がわからなくなります。そして、隣人を愛することも、神様を愛することもわからなくなります。わたしたちが、神様の愛に応えることができるとするな

らば、それは、神様の愛をわたしたちが見つめ、受け止めるということです。そして、感謝することから応えることが始まります。もし、すぐお返しということが考えているような信仰者の関係は、すぐに疲れ果ててしまうと思います。そしてお返しが出来ないから受け入れてもらえない、負い目を持つといったことに成りかねないのです。ちょうどお歳暮に高級羊羹をもらい、その羊羹を食べることなく、そのお返しのことばかりを考えて頭がいっぱいになっている状態です。このような状態であれば、お歳暮自体だんだんと、めんどくさくなっていくと思います。そこには送る喜び、感謝する喜びがないからです。神様がわたしたちに送ってくださった贈り物は、この世の中で考える事のできる最高の贈り物以上の、贈り物です。贈り物としては格が違います。ですから、そもそも神様の贈り物と同等の価値のあるものをわたしたちが送り返そうとすること事態、無理のあることなのです。そうであるのに、わたしたちは、神様の愛に応えなくてはならないという義務感により、必死になっています。神様がわたしたちに、聖書を通して言っているのは、「この愛にただあずかりなさい」ということです。言葉を換えるならば、「この愛をちゃんと味わいなさい」ということです。それを味わうとわたしたちが、次第に変えられていき、喜びの内に「その愛に応えたい」という気持ちに変えられていきます。

10節でヨハネは、「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛して」くださったと語っています。わたしたちが、神様を愛することができるのは、神様が愛してくださったからです。その愛を味わうことなしには、なにも始まりません。神様は「わたしに愛を返しなさい」とは言われておりません。そうではなくて「その愛を隣の人に与えなさい」と言われています。あえて聖書が「愛を隣の人に与えなさい」と言うかというならわたしたちの内から、愛は生まれませんからです。私たちの中から頑張って隣人を愛し、赦す力は生まれてこないというのです。7節に「愛は神から出ているのです。」とあるように、愛はわたしたちのうちからではなく、神様から出てきます。愛の源流は、神様です。イエス様がこの世に来られるまでは、その愛の流れは地下、地面の下を流れるように、わたしたちに見えませんでした。しかし、イエス様がこの世に来られたことによって、その愛が見えるようになりました。地下に流れていた神様の愛の水脈が、イエス様が低くなられ、犠牲となられ、地の中の管、パイプとなり、そこを流れて愛が地表に現れました。地下に水が流れていても、それが目に見えなければ、わたしたちはそこに水があることを知ることはできません。それと同じように、愛もこの地上に現れなければ、わたしたちは愛を知ることはできません。私たちは、イエス様が十字架に犠牲になって下さり愛を知ることができるようになったのです。イエス様が十字架にかかり、十字架上で亡くなられた時に、ある兵士がイエス様の脇腹を槍で刺しました。そうするとイエス様の脇腹から「血と水が流れた」とヨハネは証言しています。この「血と水」こそ、愛の現れです。「血」はわたしたちの罪を贖う犠牲の「血」として、この「水」は、罪に疲れ渴ききった私たちを潤すための恵みの「水」、死んで人生が終わるのではなくなるための、永遠の生命の「水」です。イエス様の死によって、見えなかった神様の「愛」がこの世に見える形となって流れてきたのです。イエス様が父なる神様によってこの世に送られて来られたので、これが成し遂げられたのです。「ここに愛がある」とこの手紙でヨハネは断言しています。

わたしたちの内側と、わたしたちの間には、神様から頂いた愛があります。その愛を隣の人に伝えるということが、わたしたちが隣人を「愛する」ことの第一歩です。ですから、この愛を惜しみなく、隣人に伝えたいと思います。そこからわたしたちの愛の関係が始まります。この神の愛は、この礼拝に集う全てのものに、伝えられ分け与えられています。まず、感謝して、この言葉に与り、味わいましょう。そして、神様に感謝し、その愛を隣の人に分け与えましょう。これが互いに愛し合うことの始まりです。